

万葉集字余り結句管見

小 野 寛

一

佐竹昭広氏「万葉集短歌字余考」（「文学」昭和二十一年五月号）に、万葉集における短歌の字余り句の成立について三つの法則が示されている。その法則になう場合に字余りが許されるのである。その三つの法則のどれにも当てはまらないのに字余りになっている例外は僅か二・二%だそうである。九七・八%まで守られる法則性があるということとは、字余りにそれだけの制限があるということである。

そうした制限の中で生み出された字余り句の中でも特に字余り結句が一首の中でどのような働きをしているか、つまりいかに評価すべきか考えてみたいと思ったのが、私の調査のきっかけであった。本稿はその調査報告の一つである。

まず結句に字余り句を置くことの効果に言及した先学の諸説の中から二、三抜き書きしてみようと思う。柿本人麻呂の歌である。

敷袴の袖かへし君玉だれの越野過ぎゆくま、たもあはめやも（巻二・一九五）

島木赤彦（「万葉集の鑑賞及び其批評」）

「又逢はめやも」と七音にするのが普通であるのに、「又も逢はめやも」と「も」の感歎詞を入れて八音としてゐるのも、斯くせずしては居られなかつた人麿の感慨を想ふべきであつて、八音の結句、実によく一首の声調の重きを受け、且、結び得てゐる。

山本健吉（「万葉百歌」）

結句「またも逢はめやも」で、そのかけがえなさの感情を再確認しているような響きがある。だめ押しの一句であり、字余りもふさわしい。

黄葉の散りゆくなへに玉梓の使を見ればあひしひおもほゆ（巻二・二〇九）

斎藤茂吉（「柿本人麿・評釈篇上」）

一首の重心はこの場合は大体この結句にあると謂つていい。

五味智英（「古代和歌」）

「逢ひし日念ほゆ」の音調は静かに重く、心に沁みるものがある。

ともしびの明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむいへのあたりみず（巻三・二五四）

斎藤茂吉

この止めなども私等には非常な力量として感ぜられる。……据わりのよいものである。

五味智英

「らむ」「なむ」の響、「や」の包む感慨、第五句の八音などが相俟って、旅愁が細々とせず大きな振幅を以て人に迫る。沈重な人麻呂らしい味のある歌である。

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしのいにしへおもほゆ（巻三・二六六）

島木赤彦

第一句切れ・第二句切れの重々しき句法を重ねて、それを第五句八音の字余り句を以て結んでゐるために、頭負けをせざるのみならず、全体に莊重の心持が現れて、各音の持つ哀韻（一首全体の音調がイ列音を多く交しえてゐるため自から哀韻を帯びるといふ筆者注）をして単なる感傷に終らしめてゐない。（中略）人麿には、又第五句八音字余りが多い。これも人麿の感動が常に莊重に働くからであって、一首の心持に重い落ち着きと、がつしりした据わりを生ずる。この歌の第五句も亦さうである。

五味智英

末句の八音は音の量のみならず、幅を持ったまま沁みて来るやうな音の質と事の内容とが支へ合つて十二分の重量感を持つ。

山本健吉

冒頭の句の字余りと呼应して、結向も44の字余りで、ゆったりと歌い収めている。

青木生子（「万葉集必携」）

初句と末句の字余りも重量感をいっそうに添え、一首全体無限の哀愁を内に響きわたらせている。

「淡海の海……」の島木赤彦、山本健吉両氏及び五味智英先生の説は、万葉七曜会編『論集上代文学』第一冊所収拙稿「大伴家持短歌の字余り句——その結句において——」にも引用した。重複していることをおことわりします。

右の諸説をまとめると、字余り結句は次のような効果を持つということになるだろう。

八音字余り句はそれ自体「重い」ことは言うまでもない。そこで

一、結びの句の重さが、一首全体をも重くする。つまり一首全体に重量感を与える。そのため一首全体が重くひびき、また心に沁みもする。

二、末が重いことが、どっしりとしたすわりのよさを感じさせる。

三、結びに重心がかかって、一首の声調の重さをしっかりと受け止め、全体にそのひびきを返すに足る力を持つ。字余り結句についてのこの評価は正しいだろうか。結句を字余りにするということは、このような効果を求めていることなのだろうか。そのことをも考えながら、万葉集の字余り結句を見てみよう。

二

万葉集四千五百数十首のうち、結句に字余り句を置くものが全部で何首あるか、私はまだ数え切っていない。調みによって変化することなので、その正確な数を出すことは大変むずかしい。

私は字余りには作者の感慨の質・量が大きく働くものだと思っていたので、作者の判明する歌だけについてこれを

調べることも無意味でないと考え、集中から代表歌人を選んでその歌について概観してみることにした。私の選んだ代表歌人の条件は集中に十首以上の歌が収載されていることで、その条件を満たす二十四人を選び出した。

第一期。額田王。歌数12、長歌3・短歌9。重出歌四八八と一六〇六は一首と数えた。

第二期。柿本人麻呂。歌数91、長歌20・短歌71。一本云の二三五一、二五六イを含む。卷十五の誦詠歌五首は含まない。

高市黒人。歌数19（すべて短歌）。高市古人作三二、三三及び高市歌一七一八を含む。また一本云の二七六イを含む。

長意吉麻呂。歌数14（すべて短歌）。

第三期。山上憶良。歌数76、長歌11・短歌64・旋頭歌1。或云憶良作三四は含まず。山上歌一七一六及び志賀白水郎歌十首を含む。

大伴旅人。歌数71、長歌1・短歌70。

笠金村。歌数45、長歌11・短歌34。金村歌集出の長歌3・短歌12を含む。或云車持千年作九五〇～九五三は両者へ入れる。

山部赤人。歌数50、長歌13・短歌37。

高橋虫麻呂。歌数36、長歌15・短歌20・旋頭歌1。九七一、九七二のみ「虫麻呂作」。あとの三十四首は虫麻呂歌中・歌集中出のものである。

車持千年。歌数10、長歌2・短歌8。金村之歌中出、或云千年作とある九五〇～九五三を含む。

第四期。大伴坂上郎女。歌数84、長歌6・短歌77・旋頭歌1。

湯原王。歌数19（すべて短歌）。

笠女郎。歌数29（すべて短歌）。

大伴駿河麻呂。歌数11（すべて短歌）。六五五の結句は定訓なし。

大伴家持。歌数473、長歌46・短歌426・旋頭歌1。三九〇一〜三九〇六は大伴書持作とする。

大伴書持。歌数12（すべて短歌）。三九〇一〜三九〇六を含む。

聖武天皇。歌数11、長歌1・短歌10。或云太上天皇御製（元正）の九七三、九七四、一〇〇九を含む。

大伴坂上大嬢。歌数11（すべて短歌）。

紀女郎。歌数12（すべて短歌）。

田辺福麻呂。歌数44、長歌10・短歌34。卷六、九所収の福麻呂歌集出を含む。四〇四四、四〇四五は家持作とする。

る。四〇六一、四〇六二は除く。

大伴池主。歌数28、長歌4・短歌24。

中臣宅守。歌数40（すべて短歌）。

狭野弟上娘子。歌数23（すべて短歌）。

平群女郎。歌数12（すべて短歌）。

右の二十四人の字余り結句数及びその使用率は次の通りである。括弧内は長歌及び旋頭歌を持つ歌人の短歌のみに
ついでの数である。

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
紀女郎	大伴書持	大伴旅人	大伴家持	大伴池主	聖武天皇	狹野弟上娘子	山部赤人	高橋虫麻呂	笠金村	額田王	柿本人麻呂	湯原王	長意吉麻呂	大伴坂上郎女	大伴坂上大嬢
12	12	71 (70)	473 (426)	28 (24)	11 (10)	23	50 (37)	36 (20)	45 (34)	12 (9)	91 (71)	19	14	84 (77)	11
2	2	12 (12)	84 (77)	5 (5)	2 (2)	5	11 (9)	8 (3)	10 (8)	3 (3)	23 (17)	5	4	25 (23)	4
一六・七%	一六・七%	一六・九% (一七・二%)	一七・八% (一八・一%)	一七・九% (二〇・八%)	一八・二% (二〇・〇%)	二一・七%	二二・〇% (二四・三%)	二二・二% (一五・〇%)	二二・二% (二三・五%)	二五・〇% (三三・三%)	二五・三% (二三・九%)	二六・三%	二八・六%	二九・八% (二九・九%)	三六・四%

17	中臣宅守	40	5	一二・五%
18	田辺福麻呂	44 (34)	5 (3)	一一・四% (八・八%)
19	山上憶良	76 (64)	8 (5)	一〇・五% (七・八%)
20	高市黒人	19	2	一〇・五%
21	笠女郎	29	3	一〇・三%
22	大伴駿河麻呂	11	1	九・一%
23	車持千年	10 (8)	0	〇・〇%
24	平群女郎	12	0	〇・〇%

坂上大嬢・坂上郎女・意吉麻呂・湯原王・人麻呂・額田王の上位六人はそれぞれの歌の四分の一以上が字余り結句を持つのである。また、憶良・黒人・笠女郎・駿河麻呂の四人は字余り結句はせいぜい十分の一であって、平群女郎と車持千年は全くない。以上の如く六人ずつ上と下がかけ離れているように思われるが、そこにはそれぞれ第一期から第四期までの歌人がまじり合って並んでいるのである。

平均値は、歌数の総計一二三三首（短歌のみ一〇八六首）で字余り結句の総計二二九首（短歌のみ二〇〇首）となり、一八・六%（短歌のみ一八・四%）である。この平均値よりやや上に、金村・虫麻呂・赤人という第三期の代表歌人がかたまつて並び、同じく旅人がひとり平均値よりやや下に位置して、その前後を第四期の歌人たちがとり囲んでいる。

右の一覧からは、字余り結句の使用に時代の影響は全くないと考えざるを得ない。つまりそこにあるのは作家ひとりびとりの個人的性格のみと考えられる。人麻呂と黒人、坂上郎女と金村・虫麻呂・赤人らと旅人と憶良、坂上大嬢と平群女郎——ここには個人差しかない。

三

字余り句は必ず中にアイウオの音のある句に限っていると云ったのは本居宣長であるが、佐竹昭広氏は前掲論文において、万葉集短歌について調査された結果、その字余り句の八九%までは宣長の言う通り句中に単独の母音音節を含むものだとして記しておられる。そしてそれを万葉集短歌字余り句成立のための第一則とされた。

坂上大嬢の字余り結句四例はその第一則にかなうもので、四例とも句中に母音音節を含んでいる。以下「母音音節」とはアイウオの四音をいう。次の通りである。

比有目八方たぐひありめやも（五八二）

君毛有鴨きみにもあるかも（五八四）

後毛将のちもあはむさみ会君（七三七）

可しめ死め念者をおもへば（七三八）「しめべくもへば」とも訓む（大系本）

ここに用いられた母音音節で始まる語は次の通りである。

あり 2

あふ 1

おもふ 1

この三語を結句に詠み込んだために、字余りが許されたわけである。

坂上郎女の字余り結句二十五例は、二十四例が同じく第一則にかなうものである。そこに含まれている母音首節で始まる語を整理して掲げると、次の通りである。

あり 9 「しるしあらめやも 驍將有八方（四一〇）、年爾母有梗（五二五）、繁君爾阿礼（六四七）、奥裳何如荒海藻（六五九）、

恋乍こひつゝ裳荒鹿あらが（六六六）、須臾羽蟻待（六六七）、驍將在八方（六七三）、悔二破有跡五十戸（六七四）、鴨二有益（六七四）

雄（七二六）

あふ 4 君爾不相可聞（三七九）、君爾不相鴨（三八〇）、未相爾（五六三）、君爾相有鴨（九九三）

おもふ 3 奈我来跡念者（五二八）、長常念者（六六一）、京師所念（一五九二）

いふ 3 「「あり」と重出二」 不来云物乎（五二七）、悔二破有跡五十戸（六七四）、言跡云莫苦荷（六八

四

いかに 2 「「あり」と重出二」 恋者奈何將為（五八六）、奥裳何如荒海藻（六五九）

あふ（堪） 1 氣太志安倍牟可母（四二二〇）

あ（吾） 1 思曾吾勢思（一六二〇）

あはれ 1 吾兒羽裳何怜（七六一）

いたる 1 及家左右（九七九）

いぬ（去） 1 立而可去哉（五八五）

「あり」が最も多く、「あふ」「おもふ」と続くところ、坂上大嬢とその母坂上郎女とは全く同じ使用傾向を示している。

意吉麻呂の字余り結句四例もまた全部、第一則にかなうものである。その含まれている母音音節で始まる語は次の通りである。

あり 2 家裳不有国（二六五）、宇毛乃葉爾有之（三八二六）

おもふ 1 古所念（一四四）

あむす（浴）1 狐爾安牟佐武（三八二四）

これも坂上大嬢・坂上郎女の傾向に似ている。

湯原王の字余り結句五例もまた全部、第一則にかなうものである。その含まれている母音音節で始まる語は次の通りである。

おもふ 2 令還念者（六三一）、珠社所念（六三五）

あ（吾） 2 見賜吾君（三七六）、目頼四吾君（三七七）

いかに 1 妹乎奈何責（六三二）

先の三人において常にトップを占めていた「あり」が湯原王には一例もないということが注目される。

人麻呂の字余り結句二十三例もまた全部、第一則にかなうものである。その含まれている母音音節で始まる語は次の通りである。

おもふ 7 古昔念而（四五）、古部念爾（四六）、相日所念（二〇九）、不見思者（二一〇）、古所念（二六

六、神代之所念（三〇四）、忘而念哉（五〇二）

あり 4 能杼爾賀有万思（一九七）、恐有騰文（一九九）、待乍将有（二三三）、妹鴨有牟（四二八）

あふ 3 亦母相目八毛（三一）、亦毛将相八方（二九五）、直不相鴨（四九六）

あく（飽） 3 見礼跡不飽可問（三六）、雖見不飽有武（四九九）、雖見不足可聞（二七二）

あたり 3 妹之当将見（二三七）、家当不見（二五四）、家门当見由（二五五）

います 1 灰而坐者（二二三）

うへ 1 浪上従所見（二五六イ）

おほきみ 1 吾於富吉美可聞（二三九）

代表歌人二十四人の字余り結句全体については、その二三九句中第一則にかなうものが二二五句、その含まれてい
る母音音節で始まる語は次の通りである。

あり 69

おもふ 53

あふ 20

あく（飽） 16

あ・あれ（吾） 9

いふ 9

おほし（多） 5

その他（各4例以下のもの） 45

字余り結句は「あり」系の句と「おもふ」系の句が主流をなしていると言っている。そしてこの二つは二十四人の合計ではほぼ近い数値を示している。つまりこれが平均値である。

この、「あり」対「おもふ」が69対53という平均値に対して、人麻呂は4対7とその比率を大きく逆転させ、「おもふ」系の語を最も多く用いて字余り結句を作っている。それに対して坂上郎女は、「あり」系の語を平均値より遙かに多く、他の語に抜きん出て多く用いて字余り結句を作るのである。人麻呂と坂上郎女との違いをここにも見ることが出来る。

人麻呂は「いにしへ」を思い、遠く「神代」を思い、今は亡き妻と「逢ひし日」を思う、過去を「おもふ」歌人であり、坂上郎女は現在「ある」ことをうたう現実派の歌人ではないのか。

人麻呂の系列に属する「おもふ」歌人は、赤人である。

赤人は字余り結句十一例中「おもふ」系の語を用いたものが実に六例である。次の通りである。

おもふ 6 古思者（三三四）、日本師所念（三五九）、将蔣登曾念（三八四）、手児名志所念（四三三）、家

不念有六（九四三）、忘而将念（九四七）

あり 4 孤悲爾不有国（三三五）、散勤而有所見（九二七）、船二四有良信（九三四）、止時冀有目（二〇

〇五）

おふ（生） 1 水草生家里（三七八）

坂上郎女の系列になる「あり」系の語を多く用いる歌人は、旅人と憶良と金村である。

旅人は次の通りである。

あり 9 淵有毛(淵有毛) (三三五)、可飲有良師(三三八)、酒西有良師(三四〇)、酒西有良之(三四

二)、樂乎有名(三四九)、經人將有哉(四三八)、方西有良思(五七四)、許等爾之安流倍志(八一二)、阿良波佐受阿利吉(八五四)

おもふ 1 同登曾念(九五六)

うかぶ 1 左氣爾于可倍許曾(八五四)

おほし 1 鳴日四曾多寸(一四七三)

憶良は次の通りである。

あり 5 斯可爾波阿羅慈迦(八〇〇)、鳥爾之安良禰婆(八九三)、秋爾安良受登母(一二五二〇)、秋西安

良禰波(一二五二五)、不樂有哉(三八六三)

います 2 伊弊社可利伊摩須(七九四)、吉美伊麻佐受斯旦(八七八)

あふ 1 潜将相八方(三八六九)

金村は次の通りである。

あり 4 久爾有勿国(二三二)、久爾有名国(二三四)、恐有等毛(九二〇)、旅者安礼十方(九二八)

あく(飽) 2 雖見不飽香聞(九〇九)、雖見不飽鴨(九一〇)

おもふ 1 尾花之所念(一五三三)

あふ 1 直二相左右二(一七八九)

いふ

1

聞跡云物曾（三六九）

おと（音） 1

梶音所聞（九三〇）

赤人は人麻呂と同じく「いにしへ」を思い、伝説の美女「手児名」を思い、また旅先にあつて遠く離れた「やまと」を思う。もちろん思うのはそれだけではなく現実の事柄を思ったりもするのだが、こういう思い方は右に見る如く旅人・憶良・金村にはない。明らかに赤人は同時代のこれらの歌人たちとは異なる歌風を持ち、人麻呂と同じ系列に立つのである。

旅人・憶良・金村のうち、最も極端に「あり」系の結句に片寄っているのは旅人である。その片寄りの度合は、各人の全字余り結句数に対する「あり」系結句の比率が、旅人は七五％、憶良は六二・五％、金村は四〇％であることで示されよう。ちなみに坂上郎女は「あり」系結句の数こそ多いが、右の比率は三六％である。旅人こそは現在「ある」ことをうたう現実派の代表的歌人であると言えるのではないか。もっともこれは字余り結句を見た限りのことであり、これだけで言い切ってしまうことはできないが、その一つの大きな傍証とすることができのではないだろうか。

憶良もまた「おもふ」系の結句が一つもなく、「あり」系の結句に片寄っており、人生詩人と言われる通り、現実に生きるこの現世を見つめていた歌人であったことを示唆している。

家持は、その字余り結句八十四例のうち第一則にかなうものは八十三例である。その母音音節で始まる語は次の通りである。

あり

21

従手不離有牟（四〇三）、鸛悒将有（六一一）、惑毛安流香（七二七）、不知香安類良武（七三〇）、

事二四安利家理（七二七）、将譽十方不有（七八〇）、花爾有目八方（一一一〇）、不開毛有奴香（二五九二）、不鳴安良奈久爾（三九一九）、伎奈可受安流良之（三九八四）、宇良爾安良奈久爾（四〇三七）、伊家流思留事安里（四〇八二）、貴久之安礼婆（四〇九四・四〇九五）、牟智思久母安流香（四一〇五）、之可爾波安良司香（四一〇七）、安流へ久母安礼也（四一一三）、安吉爾安良受得物（四一二六）、遊爾可有（四一七四）、加流々日安良米也（四一七五）、奈我久波安利家里（四四八四）

おもふ 19 令尽念者（六九二）、物不思四手（七三二）、吾念莫国（七七〇）、長等曾念（一〇四三）、繁之所

念（一五六七）、妹乎之曾念（一六三三）、思奴倍吉於母倍婆（三九六三）、伊爾之敵於母保由（三九八六）、和

須礼孛於毛倍也（四〇二〇）、京師之於母倍由（四〇二七）、和須礼氏於毛倍也（四〇四八）、和礼乎事於毛波

婆（四〇五五）、大路所念（四一四二）、念之念婆（四一九一）、相念吾者（四二一五）、伊吉能乎爾念（四二八

一）、比登里志於母倍婆（四二九二）、倍奴倍久於毛保由（四三六二）、久爾弊之於毛保由（四三九九）

あ・あれ（吾） 7 嘆曾吾為（七一四）、辞痛吾為（七四八）、念曾吾為類（七八八）、出而曾吾來之（二六一

九）、尊安我吉美（四一六九）、念曾吾為流（四一九八）、珠等曾吾見流（四一九九）

あく（飽） 6 雖見不飽可聞（一六二五）、見礼杼安可奴香聞（三九二六）、何如将飽足（四一六六）、雖聞飽不

足（四一七六）、美礼杼安可奴香母（四四五一）、美礼杼安賀奴香母（四四五三）、

あふ 5 妹爾相難（七八三）、妹爾不相有者（七八五）、母等米安波受家牟（四〇一四）、伊母爾安波牟多

米（四三〇六）、末多母安波無多米（四四六九）

いふ 3 将来云比登乎（七四四）、恋云物呼（一二二九）、可芸利奈之等伊布（四四九四）

おく 3 若子乎置而（四六七）、塞毛置末思乎（四六八）、秋露置有（二五九七）

おほし（多）3 故布流比於保家牟（三九九九）、念日曾於保伎（一云噴日曾於保吉）（四一六二）、不相日乎於保

美（四一六八）

いく 2 於吉氏伊加婆乎思（三九九〇）、於伎旦伊加婆乎思（四〇〇六）

その他一例もの 計14

家持は「あり」系の結句が「おもふ」系の結句より僅かばかり多いという前掲の平均値にぴったりの数値を示し、そのいずれにも片寄らない。しかしこれを作歌年次に従って眺めてみると、いささかの片寄りが現われてくる。

時期区分	歌数	字余結句数	「あり」	「おもふ」
I	157	33	9	6
II	135	25	9	6
III	103	17	2	5
IV	78	9	1	2

時期区分 I 青春習作期（越中赴任以前。卷三・四・六・八・十五・十七 3926 まで）

II 越中習練期（越中赴任後、天平勝宝二年二月まで。卷十七・十八所収）

III 歌境確立期（天平勝宝二年三月から同五年二月まで。卷十九所収）

IV 宴席歌詠期（天平勝宝五年八月から天平宝字三年正月まで。卷二十所収）

家持の作歌時期区分を、私は右のようにしているのだが、それによれば右表に見る如く、習作期および習練期においては共に9―6と「あり」系の語がやや優勢であるが、平均値に近い特徴のない数値を示し、次の歌境確立期に至ってその傾向ががらりと変わる。ここでは2―5と「あり」系の語が激減して「おもふ」系の語が浮かび上がる。宴席歌詠期では歌数は七十八首もありながら、1―2とさえない数値を示し、「あり」系でもなければ「おもふ」系でもないのは家持の詩泉の枯れ果てた結果なのだろうか。

どれもこれも家持の、その時期の家持の、ありのままの姿なのだが、彼の歌人として最も確かな時期である右の第三期には結句に「おもふ」系の語の比率が高いことは見逃せない事実である。家持をこの時期だけで見ると、人麻呂・赤人の系列に立つということが言える。（ただし「おもふ」の対象あるいはその仕様は人麻呂―赤人―家持と変わっている）

四

沢瀉博士「万葉集注釈」巻二の三十八ページに「木下正俊君の調によると、結句にア行音を中間に含む七音句は極めて少く、その場合は大抵八音句になるのが例だといふ事である。この調査は尊重すべきものだとは私は考へる。」とある。木下氏のこの調査とは「準不足音句考」（『万葉』第二十六号、昭和33・1）のことであろうと、中西進氏から御教示いただいた。

木下氏はこの論文で、句中に単母音音節を含むものは字足らずに準すべきもので、それが当時の人々には思いの外不安定に感じられていたかも知れないと考えられ、特に結句には字足らずが一つもないことから結句は「音数的に

安定を要求される詩的言語としての制約を負うてゐたのではないか」として、「新校万葉集」によって結句の「準不足音句」八十六例を上げ、それらを母音を含まぬ定数音句か母音を含めた字余り句にできる限り改訓することを試み、確実に改訓されるべき四十五例を示された。

本稿の、代表歌人による字余り結句の調査は、岩波日本古典文学大系本・沢瀉注釈・塙書房本の三本の訓によっている。三本のいずれか一本でも字余りに訓じているものは字余り句として採ったし、中でも最も字余り結句に訓むことの多い塙本には佐竹氏・木下氏が加わっておられるため右に記されてある改訓が生かされているので、勢い訓みうる限りの字余り結句を集計した結果になっている。

代表歌人二十四人の歌の総計一二三三首から字余り結句を持つ歌二二九首を差引いた残り一〇〇四首の中に、単独の母音音節を含む結句がどのくらいあるだろうか。つまり母音音節を句中に含みながら七音句になっている結句を調べてみる。

代表歌人二十四人の歌については次の七例である。歌番号の右肩に△印を付したのは長歌の結句であり、短歌の場合には五例である。

宮敷座（二三五一、人麻呂）
みやしきざ

水葱乃煮物（三八二九、意吉麻呂）
なぎのあづもの

夜周伊斯奈佐農（△八〇二、憶良）
やすいしなさぬ

当不相将有（九五三、金村・千年）
あたあはざらむ

吾毛将思（五八七、笠女郎）
われもおもはむ

所念妹（六九一、家持）

追気奈久毛字之（△四二〇七、家持）

今、二二九例の字余り結句を認めるならば、句中に母音音節を含んで成るものは二二五例で、句中に母音音節を含む結句は九七％が字余り句となり、三％が七音句ということになる。三％といえば、例外として切り捨ててしまってもいい数字であろう。つまり、句中に母音音節を含む結句は全部字余りになるのだということが言えそうなのである。しかしこの仮説が成り立つためには「九七％」の確かさが証明されなければならない。字余りに訓んだ二二五例の「訓」の確かさを調べることである。

まず応急処置として、大系本・沢瀉注釈・埤本の三本の訓が一致したものはよしとする。そしてそのうち一本でも七音訓みをしているものを取り上げてみよう。それを整理すると次の通りである。

一、音韻上の操作によるもの

(1) 語頭の母音を脱落させる。

といふ→とふ （六二四、七四四）

います→ます （二二三）

うへ（上）→へ （一〇三五）

おと（音）→と （九三〇）

おもふ→もふ （六三一、六四四、六六一、六九三、七三六、七三八、七七〇、一〇四三、一六六一、四一九）

(2) 縮約その一。「あり」が来る場合、その前の音節の母音が消滅してその子音とア音が合する。

くありー↓かり (一九九、六一一、九二〇)

ずありー↓ざり (四〇三)

てありー↓たり (九二七)

(3) 縮約その二。前の音節の母音が消滅すると同時に後の音節の子音の消滅をも伴う。

待^{まち}乍^つ將^あ有^ら有^ひー↓あらむ (二三三、人麻呂)

二、訓み添えをしないもの

強意の助詞「し」の訓み添えをしないで七音にする。

^ふち^にし^{あり}こ^そ

淵有^{ふち}有^に乞^{あり} (三三五、旅人)

^おは^ちし^おも^ほふ^ゆ
大路所念 (四一四二、家持)

三、訓に問題があるもの

不見^み思^え者 (二一〇、人麻呂)

狐爾安牟佐武 (三八二四、意吉麻呂)

一の(1)(2)の場合は、それによって母音音節が消滅して母音音節を含まない七音句になるのであるから、問題は残らない。ただ字余り結句例の数が減るだけである。しかし句中に母音音節を含む結句は全部字余りになるのだという仮説が証明された時には、脱落や縮約をしてまで七音句にする必要もなくなるのである。

一の(3)および二の場合は、それによって母音音節を含みながら七音句に訓む例となり、例外の三%がふくらみ、先の仮説に対してマイナスとなる。

一の(3)の「将有」は「あるらむ」か「あらむ」か。それらの結句における仮名書例は次の通りである。

「あるらむ」 不知香安類良武(七二〇)

波奈礼弓安流良武(三六〇一)

古比都追安流良牟(三六六九)

「あらむ」 不所見香聞安良武(七八)

可倍波伊香爾安良牟(二八五一)

阿波受可母安良牟(三三五五)

伊呂爾侶受安良牟(三三七六)

古非都追夜安良牟(三四三三)

仮名書に準ずるもの

「あるらむ」 何如有良武(一四四〇)

「あらむ」 妹鴨有牟(四二八)

妹爾鴨在武(一四〇七)

仮名書例の上半部の語を見ると、「あるらむ」の場合は三例とも四音節であり、「あらむ」の場合は例外なく五音節である。「あらむ」に四音節の語がついても七音句として成立しうるであらうと思われるのに、結句の場合はその例がないのである。つまりすべて字余りである。この事実から「将有」結句の訓みを推定するならば、その結句の上半部が四音節の語ならば「あるらむ」と訓み、五音節の場合は「あらむ」と訓んだのではないかと思われる。右の準

仮名書の場合も「いかに・あるらむ」「いにもかも・あらむ」と訓むのである。

こういう述べ方をすると、「あるらむ」と「あらむ」との意味の違いを考慮に入れない外形だけからの論のように見えるかも知れない。その意味の違いは、作者によって「あるらむ」と「あらむ」のいずれかが選ばれた時、その上に来る語を四音節にまとめるか五音節に作るかという操作が作者の側で行なわれるはずであるから、その上半部の音節数によって判断することができないのではないかと、私は思うのである。

また、「あるらむ」と「あらむ」に慣用的な固定化も見られる。

待筒 在 (五九四)

待乍 将有 (二二三)

待乍 将有 (二〇七八)

恋管母 将有 (七九)

恋乍裳 将有 (四八七)

恋乍乎 将有 (二六〇三)

恋管哉 将在 (二七〇八)

恋乍也 将有 (三一九八)

古非都追夜 安良牟 (三四三三)

不取香聞 将有 (三八六)

不成可毛 將有 (一三六四)

不相鴨 將有 (二七三一)

「待ちつつ」は「あるらむ」で、「恋ひつつ」は「あらむ」だったに違いない。

三の「不見思者」は沢瀉注釈と塙本は「みえなくおもへば」と八音字余りに訓み、大系本は「みえぬおもへば」と七音に訓んでいる。同一表記の例としては卷七の一〇八三の結句に「不見、念者」とあり、これは大系本も「みえなく」と訓んでいる。類似のものに「不相、念者」(五三五、一四一〇)、「不合、思者」(二六五二)があり、これは三本とも「あはなく」と訓んでいる。結句「思へば」には「縦左久思者」(六四四)、「惡良苦念者」(一九〇七)、「逢良久念者」(二〇七四)や、「相樂念者」(九九六)、「戀幕思者」(二二七)、「絶樂思者」(一三三二)、「解樂念者」(二五五八)などがあって、「〇〇〇く思へば」の形があることが認められるだろう。「不見思者」は「みえなく思へば」と訓むのが正しいと思う。

「狐爾安牟佐武」は「狐」を「きつ」と訓むか「きつね」と訓むかの問題である。「狐」は古くから古名「きつ」だとされて来たが、沢瀉博士は「注釈」において、倭名抄(七)に「音胡、岐豆禰」とあること、また日本霊異記上(二)に女に化けて「采て寝」たところから「名為岐都禰」とあることをあげて、古くから「きつね」であったと言われた。「狐」が「きつ」だとすれば「きつね」の「ね」は何かという疑問が、「ね」は接尾語であるという答では解かれようはずもなく、「狐」は沢瀉注釈・塙本にならって「きつね」と訓むべきではないかと思われる。

以上、「し」の訓み添えの問題が残ったので、字余りに訓んだ二二五例のうちその二例を除いて、二二三例の「訓」は字余りに訓むのに無理がないことがわかった。先に仮説としてあげた「句中に単独母音音節を含む結句は字余りに

する」という約束が、少くとも万葉時代に入ってからではできていたことを認めたいと思う。「少くとも万葉時代に入ってから」と付け加えたのは、記紀歌謡などの調査を全く怠っているからである。

この約束が認められれば、先述の「し」の訓み添えもこの約束に合わせるための操作として認められるし、また七音結句の七例の訓もこの約束に副って再検討すれば「三%」が更に小さくなりそうな気配がある。

例えば「吾毛将思」(五八七)はワレモシノハムと訓む説を採ることができよう。また再検討の余地のない仮名書二例(八〇二、四二〇七)の「安寝」と「憂し」は、これらの語を含んで字余りになっている例がないので、字余りにすべき単独母音節の仲間からはずして扱うべき語であるかも知れない。やはり木下氏が前記論文で古今集の場合をとり上げ、句中に「憂」と「老い」がある場合は字余りにならないことを指摘しておられる。そして「老い」の場合は、その母音イが語中に現われるものであることに注目されたが、「安寝」もまた同じである。そう言えば代表歌人二十四人の結句にはこの「安寝」以外にいわゆる語中母音の例は見られない。

いささか性急だが、この三例を除外すれば例外は四例となり、三・〇%は一・七五%になる。

先の仮説を、私は、結句においてという条件の下にたてた。木下氏の調査でも「結句に」とことわっている。では、単独の母音音節を中に含む句が結句以外の場合にはどういう結果を示すか簡単に記しておこう。これもまたインスタント調査で、代表歌人二十四人の短歌について、塙本の訓みによって句毎に拾い上げ集計したものである。短歌総計一〇八六首である。拾いもれがあると思われるが、各句の特徴を知ることではきよう。

次の表による定音句率——句中に母音音節を含みながら五音・七音の定音句になっている比率——は、第一句六・四%、第二句六八・五%、第三句三・〇%、第四句七四・〇%、結句二・五%である。七音句である第二句と第四句

合 計	定 音 句	字 余 句	
78	5	73	第一句
222	152	70	第二句
66	2	64	第三句
169	125	44	第四句
201	5	196	第五句

とが大体7—3の割合で七音に多く訓まれているのに対して、五音句である第一句と第三句とは定音の五音に訓まれるのがごくまれである。そして結句は七音の定音句に訓まれることが、第一、三句の比率より更に低い（塙本の訓みによる）。

五音句は一句中で占める一音節の割合が七音句より大きい（五音句中の一音節は五分の一を占めるとすれば二〇%、七音句中の一音節は七分の一になるから一四・三%）と考えられる。そこで一音節が単独母音音節であることを、子音を一つ欠いている状態だと考え、その欠いていることの一句への影響が大きいのではないだろうかと考える。それがもう一音節の追加を要求するのではないだろうか。七音句の場合は一子音を欠いても影響が比較的少なく、自己のうちに補い合うことができるのではないだろうか。

ところが結句の場合にはそれでは不十分であって、どうしてももう一音節を加えて完全無欠の句で結ぼうとする。それが結果として字余りになるのではないだろうか。

句中に単独母音音節を含む結句は、字余りにしても差支えないというのではなく、必ず字余りにするものだったと言えると思う。

五

字余り結句を字余りであるが故に評価することは本末顛倒と言わねばなるまい。結果として一首の結びとして効果的であることは言えるが、作者の感慨をして字余りを生み出したというような評価は正しくない。

結句以外の句では、特に七音句である第二、四句では、句中に単独母音音節を含んでも必ずしも字余りにならないのである。こういう場合には、字余りにすることは作者の意志にゆだねられていると見られる。ところが結句の場合には作者の意志の入り込む余地が全くないと言っているのではないか。

代表歌人二十四人の字余り結句二二九例中、句中に単独母音音節を含んでいるものが二二五例であることは、字余り結句の九八％が作者の意志によらず、いわば外からの強制によって成ったものだということである。そしてこれが句中に単独母音音節を含んでいる結句の九七％なのである。あるいは九八・二五％なのである。

すなわち、句中に「あり」「おもふ」「逢ふ」「飽く」「いふ」等の語を含み、それで一首を結ぶ結句の九七％が字余りになっており、それが全字余り結句（代表歌人二十四人の）の九八％なのである。

つまり字余り結句が多いか少ないかは、結句に「あり」「おもふ」「あふ」等の語を多く使うかどうかによって異なるのである。その結句に含む母音で始まる語は、五四・三％が「あり」（三〇・七％）と「おもふ」（二三・六％）であって、あとの語はそれぞれ一〇％に満たない。その「あり」と「おもふ」が、結句に現われる「あり」と「おも

ふ」の全てだと言っている。

坂上郎女は字余り結句二十五例で「あり」9「おもふ」3であったが、それが彼女が「あり」と「おもふ」を結句に用いた全てであった。人麻呂は字余り結句二十三例で「あり」4「おもふ」7であったが、これが彼が結句に用いた全てであった。また、字余り結句の数は少ないけれども、憶良は「あり」5「おもふ」0、旅人は「あり」9「おもふ」1、赤人は「あり」4「おもふ」6であったが、これも各々「あり」「おもふ」を結句に用いた全てであった。

家持に次いで字余り結句の絶対数の多い坂上郎女と人麻呂とを比べる時、このきわやかな差は、これが彼らの全用例であることによって、坂上郎女を「あり」系の歌人、対して人麻呂を「おもふ」系の歌人と呼びうることを確信させるのである。

また同様に、旅人・憶良を「あり」系の歌人、赤人を「おもふ」系の歌人と呼んだことも、彼らにそういう一面があるという意味で（坂上郎女・人麻呂の場合も同じ意味）、認められるのではないだろうか。

〔付記〕 本稿は昭和四十五年十一月七日、古代文学会例会において研究発表したものである。その際、賀古明博士・森淳司氏・江野沢淑子氏・阿蘇瑞枝氏・中川幸広氏・近藤信義氏・高野正美氏・高橋六二氏より、また成稿に際しては中西進氏より御懇篤なる助言をいただいた。それによって書き加え、書き改めたところも少くない。記して心から感謝の意を表する次第である。